

## 4 Chauncy Lane

吉原秀東

1979年6月から80年6月の帰国まで一年間住んだ下宿があった。  
場所は米国 Massachusetts 州、Cambridge 市。

大家はシニアの女性（多分未亡人）。成人の息子が時折帰宅していた。  
3階からなるメゾネットタイプの Condominium で、真ん中の2階に大家が住み、  
最上階と1階は大学院生が借りていた。台所は共用していた（ように記憶する）。  
バスルームとトイレについては記憶が無い。

自分はその1階に住んでいた。当時、H 大学大学院でロシア語を学んでいた。  
1978年8月に会社から派遣された社会人留学生だった。その学科には日本から  
外務省、M 商事、I 商事が留学生を派遣していた。大学側も受け入れには積極的  
であった様だ。

寝ている時間以外は自宅か大学で勉強だ。人生の中で一番良く勉強した時間  
であった。会社から派遣され、給料（但し3割カット）も賞与も貰って勉強する  
ことは正に業務であった。遊んでいるヒマは無かった。40年経った今でも、試  
験の成績が芳しくなく、学科を drop する夢を見ることがある。

1980年6月に「無事に」2年間の履修プログラムを終了し、帰国することにな  
った。社会人4年生になっていた。

帰国の荷造りをして、船便と航空便に分けた。最後まで残った机周りの辞書や  
書籍などの荷物を航空郵便で発送して帰国の途についた。

帰国後程無くして、かの大家から郵便が届いた。曰く、「郵便局から航空便で  
出した荷物が戻って来た。重すぎて航空郵便では送れないという。どうする？船  
便で送り直すか？」

業務多忙もあり、大家への返信が出来ずにいた。そうこうするうちに、忘却の  
彼方に置かれた。その内、海外駐在に出て、この件は完全に忘れ去った。何が入  
っていたのかも思い出せない。今でも、あの住所に私の航空郵便は残っているの  
だろうか。それとも、大家のマダムかその息子によって焼却処分されたか。今も  
って定かでない。今頃になって、あの時の荷物の中身が妙に気になる。